

核兵器と米国社会：スミソニアン事件と「記憶」の中の原爆投下

アレキサンダー・ヴィーシイ
(国際学部教員)

司会 今日のテーマは「核兵器と米国社会：スミソニアン事件と「記憶」の中の原爆投下」です。歴史と僕らが言っている部分と、記憶との関係。それが国によってどう違って来るか。その違って来る背景になるような情報の共有はどういうものか。そういったお話を今日はしてくださるといふふうに理解しています。あまり私がまたマイクを独占してはいけないので、早速アレキサンダー・ヴィーシイ先生にマイクをお渡しして今日の授業をお願いしたいと思います。先生にお任せしますが、授業の後、質疑応答の時間をとれればと思いますのでよろしくをお願いします。

ヴィーシイ 紹介いただいたヴィーシイと申します。残念ながら今日は仏教の話ではなく、もう少し残酷なアメリカ人と原爆投下の記憶をテーマとしてとりあげます。いままで2回ぐらい被爆者の話を皆さんは聞きましたので、この事件の残酷さがどういうものかわかると思っています。今日はアメリカ人、特に90年代のアメリカ人が、現在アメリカ社会において原爆投下を政治的または文化的にどのように理解しているか、スミソニアン博物館を中心にして考えたいと思っています。

まずは一つの本を紹介します。著者はアメリカのコロンビア大学教授、エリック・フォナー(Eric Foner)です。このフォナー氏が1992～1993年に一冊の本 *Who Owns History?: Rethinking the Past in a Changing World* を出版しました。そ

この本のテーマはここに書いてあるように、「だれが歴史を決めるか」ということです。

高校の歴史の教科書では大体、話が決まっているでしょう。ある時期にだれが何をやったかとか、そのような情報を重視して歴史を覚えるのです。それでもいいのですが、今日の授業を通して原爆の問題もよく考えてほしいですし、同時に歴史は一体だれの影響で形成されているとか、実際に歴史に偏見があるのか、ないのか、または歴史は変わるか、だれの影響によって変わるのか、そういう奥深い問題も考えてほしいです。歴史は意外と急に変わるもの、それがよく見えてくると思っています。

エリック・フォナーの、だれが歴史を決めるか。それが今日の裏のテーマです。特にこのフォナー氏の本によれば、歴史資料や情報にあたる分析方法、さらに歴史の学者の考え方によって歴史の変化に刺激を与えられます。実際に歴史は変わります。ずっと永遠にあるわけではありません。一つの歴史解釈の流れが成長し、ある時代に結構発展し、そしていつの間にかその解釈が消えていく。ある意味で歴史は生きているといえます。

さらに生きているなら、歴史はどうして変わるのでしょうか。その変化の背景に、文化的、政治的、極めて政治的な問題が絡まっています。そして歴史を確立する際には歴史を解釈する人の権力

と権威によってその内容が変わってくる。そういうわけで、だれが歴史をかえる権力を持っているか、そしてその権力によってどのように政治的、文化的に歴史の内容を変えることができるのか、ということが今日の主なテーマです。

歴史は変化するため、より開放的な歴史の可能性があります。例えばアメリカの歴史であれば、60年代までアメリカの歴史教科書の中に黒人の歴史はほとんど出てきませんでした。女性史もほとんどありませんでした。移民の歴史もありませんでした。どちらかという、アメリカの歴史教科書は白人の歴史を記述しました。幸い、60年代の市民運動家によって、より開放的な歴史が記述されるようになりました。しかし別の面を考えると、歴史が変化するなら、より閉鎖的な歴史、排他的な歴史記述の可能性もありますね。そういうちょっと恐ろしい歴史をつくる可能性がいつでもあります。フォーナー氏が *Who Owns History* にこのことをよくよく考えるようにと強調しました。

歴史はだれのものでしょうか。それをもうちょっと厳密に考えると、だれの声が残り、だれの声が消えるかということです。前々回に被爆者の方が話に来ましたね。皆さんがそれを聞き、自分の友達、親、将来の子供に伝えれば、授業がきっかけで被爆者の声はまだ響き続けるでしょう。「その事実があった」と言っている声が残ります。けれども、歴史学者などが、ああいうふうに話されたことを否定したり無視したりすれば、その非常に重要な話は他人に伝わるものがなくなり、被爆者の声は永遠に消えてしまいます。

そのため、歴史を決める権力について、だれがそれを保持しているのか、それをよくよく考えなければなりません。その権力によってある社会、もしくはある文化圏の将来の構造が変わってくるわけです。つまり歴史の内容、歴史の理解によって社会がどのように変わるか、そういうテーマも関係してきます。歴史は単に教科書から覚えな

ればならない物語ではありません。

具体的な話に入りましょう。今日は1995年のスミソニアン博物館のエノラ・ゲイ爆撃機の展示会が話の中心となります。まずは場所を考えましょう。ワシントン DC に行ったことがある学生さんはいますか。——ああ、いますね。ワシントン DC の中心にモールという地域があります。モールには何があるかということ、ここは連邦政府の国会です。ホワイトハウスはここにあります。

学生 それは慰霊塔ですね。

ヴィーシィ そうです。これがワシントンモニュメントです。ワシントン大統領、アメリカの第1代大統領の記念碑のようなものですね。ここがリンカーン大統領に関する記念碑。ジェファソン大統領のための記念館はここにある。実は日本が1870年代にアメリカに寄附した桜があるので、春に行ったらものすごく美しいですよ。

広いところもありますね。ここで市民や観光客がゆっくり歩きながら、いろいろな有名な博物館を見る事が出来ます。ここにスミソニアンがあります。そして国立公文書館もここにあって、ここに独立宣言などが置いてあります。つまりこのワシントン DC の中心になるナショナル・モール（通称「モール地区」）が、アメリカ人にとってアメリカの理想をあらわす空間と考えられているわけです。アメリカ人がそこに行って、「アメリカ人として生まれてよかったな」という誇りを持つように、そういう気持ちになるためにつくられた場所と考えていいわけです。

こういった博物館や美術館の展示物については、それは慎重に考えるべきだとよく言われています。あんまり、何と申しますか、きれいな空間を汚さないように見苦しいものを置いてはいけないと思われています。例えばこの写真ではちょっと見えませんが、ホロコースト博物館はここにあります。実際はホロコースト博物館をつくるべきかどうかという激しい議論がありました。

内容が暗いし、人間のすさまじさがよく反映されるものになるので、このモール地区の潔癖な図に相応しいかどうか、という疑問の声がありました。それと同じ意味で、スミソニアン博物館の事件は、このモール地区において、エノラ・ゲイと広島の内爆の話がふさわしいかどうか、それが今日お話しする問題のもとにありました。

そのスミソニアン協会の中いくつかの博物館がありますけれども、今日は国立航空宇宙博物館（略称NASM）が中心となります。これは最初のころは、第二次世界大戦直後に航空博物館としてつくられ、アメリカの航空史に出てくる有名な飛行機が展示されています。第二次世界大戦前の民間用の飛行機とか、ライト兄弟のライトフライヤー号もあるし、1927年にリンドバーグが大西洋を横断したときに乗ったスピリット・オブ・セントルイスなど、有名な機体が置いてあります。

アメリカ人がここを見ると、アメリカの技術、アメリカの航空史に誇りを持つように、そういうふうな目的でつくられたと考えていいわけです。60年代に入って宇宙船をつくるようになり、やはり航空だけでなく、宇宙博物館にかわりました。そういうわけでアメリカの技術はもちろん、ある意味でアメリカの航空に関する大制度を展示しています。そこに入ってアメリカ人の創意工夫などを尊敬するようにつくられたところである、という解釈をする人がいるわけです。たしかに、入ると唖然としますよ。アポロのスペースカプセルもあるし、歴史本や映画で見る有名な機体、飛行機がいっぱいあるし、ちょっと不思議な場所です。

80年代にマーチン・ハーウィット（Martin Harwit）という人が館長になりました。この人は実際チェコスロバキア出身で、第二次世界大戦前に生まれている人ですので第二次世界大戦の経験者で、戦争の事実をよく理解していた人です。彼が第二次世界大戦後にアメリカへ移民して、その後、有名なコーネル大学で天文学者になりました。

た。そういうわけでハーウィットは技術者でもあり、そのため1987年に館長になったときに歴史的な機体を展示する博物館にふさわしい人であると思われたのでしよう。

ただし、ハーウィット館長は歴史に関しても興味がありました。前に言ったようにスミソニアンの国立航空宇宙博物館（NASM）に入るとすばらしい機械がいっぱいあって唖然とします。しかし、その機体の歴史的な背景や利用方法等の説明はあまりありません。ハーウィット館長の考えは、本当にその機械の意味を理解したいなら、その背景もよく理解しなければならないということでした。彼にとって博物館は単なる国の名誉を訴えるところだけではなく、実際に歴史の内容を検討すべき場所であると考えました。

よって、彼は、歴史に関する異なる意見があっても、何人もの学者を集めて歴史は実際にどうだったかということを議論していい、NASMはそういう場所だと考えました。展示物の説明に、その歴史的な事実もよく述べるべきである。例えば1969年にアメリカ人がアポロで月面に行きましたよね。あれを可能にするために、サターンV（ファイブ）というロケットを使用しました。あのロケットがなければ月面まで行くことができなかったけれども、設計者はワーナ・ヴォン・ブラウン（ヴェルナー・フォン・ブラウン（ドイツ音））（Wernher Von Braun）でした。60年代、このワーナ・ヴォン・ブラウンは一人の英雄として認められましたが、実際に第二次世界大戦中に彼がテロ用のV2ロケットも設計しました。ハーウィット氏の考えでは、そのような歴史も説明すべきであるということでした。

もう一つの例として、NASMに第一次世界大戦の飛行機が置いてありますが、第一次世界大戦の説明はあまりありません。ハーウィット館長によれば、本当にその飛行機のことを理解したければ、展示会で戦争の塹壕戦の残酷さを示す必要性

があるということでした。そのため、ジオラマをとおして、第一次世界大戦の事実も表すように指示しました。

ハーウィット館長の方針を分析すると、歴史を理解したいなら、展示会の説明は普段あまり考えたくないものも取り上げるべきであるということです。しかし、前に説明したように、モール地区はある意味でアメリカ人にとっては宗教的な聖地のようなところですので、見るに耐え難い、歴史的に複雑なことを展示すべきかどうか、そういう疑問が出てきます。

さあ、ここでエノラ・ゲイについて話したいと思います。まずはその爆撃機の歴史を考えてみたいですね。もちろん広島に初めて原爆を落とした飛行機として有名になりましたが、戦後に実験用の飛行機としてよく使われました。その後50年代に入ってB29型が古くなり、アメリカなどがジェット爆撃機を利用するようになりました。エノラ・ゲイは有名だったため色々な博物館で保管されましたが、展示物として相応しいかどうか、そういう疑問が長年続きました。

ある意味で原爆を落とすことで有名になりましたけれども、エノラ・ゲイ自体が技術的にそんなにすぐれた飛行機ではないという判断もありました。その上冷戦に入って核兵器の恐ろしさがよくわかるようになり、アメリカ人の中には「核兵器を作って、実際に落とした」ということを誇るべきか、そういう疑問があったため、エノラ・ゲイを保管していても、展示会に出されず普通の市民は見ることはできませんでした。

広島と長崎の原爆投下、そして終戦の50周年記念に当たって、1994年、ハーウィット館長は展示会を設けようと思いを固めました。しかし、ただ終戦記念のためではなく、ハーウィット館長はエノラ・ゲイで戦後の歴史をどのように理解すべきか、この課題を取り上げたかったのです。大勢のアメリカ人にとって「終戦のきっかけ」という見

方が普通でしたが、同時にエノラ・ゲイは90年代までに続いた冷戦の出発点だったと考えてもいいのです。私たちがその事件をどういうふう理解すべきか、そういうことも強く訴えようと思ったわけです。アメリカの市民が50周年記念に、私たちも振り返ってもう一回考えて、実際に私たちが何をやったか、それを慎重に考えるべきじゃないか、と思って展示会を開催しようとしたわけです。

そういうわけで内容はどうか。まずは戦争の背景を描いて、そして太平洋戦争の実態もあらわすべきですね。確か2～3年前だったか、クリント・イーストウッドが「硫黄島からの手紙」という映画を監督しました。あの映画を見ると、第二次世界大戦のすさまじさがよくわかりますね。これはヨーロッパの戦争と違ってやはり文化の戦争であり、人種の戦争でもありました。そういうわけで日本人の兵隊もアメリカ人の海兵隊も、お互いに相手に対する慈悲がほとんどありませんでした。ハーウィット館長もその事実を描くべきだと考えました。

そして実際の戦場以外にも、原子爆弾を作る方法、政治家や軍人の間に起った利用すべきかどうかの議論も説明すべきです。爆心地にいた被爆者の意見や、経験等の実際の話、そしてその直後に撮った写真や、遺品などの展示を検討すべきと考えました。皆さんはその遺品を見たことがあると思います。半分溶けた時計や、弁当箱、子供のおもちゃを見ると体が震えるほど怖ろしいものです。つまり50周年記念に当たって改めてどのような結果があったか、実際に意味があったか、エノラ・ゲイの展示会はアメリカ人が自分の歴史を振り返って考えるための機会だと思いました。

これがハーウィットの提案でした。この提案を実現するためにハーウィット館長とほかの学芸員は、最近の歴史研究も入れたいと思いました。特になぜ原子力爆弾を落としたか、近年学者のあい

だではこの問題に関して色々な説明が出てきました。戦後直後から通用した説明は硫黄島や沖縄の上陸戦の経験によって、日本軍は絶対に降伏せず死ぬまで戦うため、広島・長崎への原爆投下は必要というものでした。さらに、投下しなければ、日本本土での上陸戦が必要になっただろうと言う説もありました。もし実際に上陸戦に入ったら大勢のアメリカ軍人、そして日本の一般市民が死んだだろうといわれ、更に膨大な死者を出さないように、終戦のために落とすとの説明が一般的に信じられていました。つまりアメリカ空軍は一つ、二つの町を完全に破壊することによって、アメリカ人の兵隊さん、そして日本人の命も救ったのだ、という説明でした。

けれども、80年代に第二次世界大戦に関する新しい資料が頻繁に出てきました。それを見ると、実際にアメリカ軍の副司令官のあいだに反対の意見もありました。例えば米海軍のキング元帥によれば、海軍の封鎖作戦によって空軍の爆撃が不要ということでした。または空軍のアーナルド大將は、従来の爆弾を使えばいいのであって、原子爆弾を実際に使う必要はないと主張しました。有名なアイゼンハウワー元帥（この人は後で大統領になりましたけれども）、彼もやっぱり利用を批判したらしいですね。

この資料に基づく新しい説によれば、原子爆弾の利用は終戦の問題とあまり関係がなかったということなのです。実は1945年のころから米国の政治家、軍事にとって次の敵は日本とドイツではなく、ソ連になりました。そういうわけでソ連軍に威嚇的なメッセージを出すために原爆を使ったのです。ソ連軍が、日本の都市の破壊を見て第二次世界大戦後にアメリカ軍やイギリス軍と戦わないよう、広島と長崎に原爆を落としました。つまり終戦のため、あるいは人の命を救うためではなく、政治的な理由で爆撃したのではないかという議論が80年代から出てきて、ハーウィット館長と

学芸員はそれも取り入れて、アメリカの市民に、このような研究の結果もあると知らせるべきと考えました。そうして、展示会を見たアメリカ人が色々な情報・史料の意味を考えながら多様な意見をまとめて自分なりの意見を持てばいいと考えました。

もう一つの論点は、「救われた人数」の問題です。戦争直後に調査によると上陸戦が必要だったらアメリカの兵隊や日本人をあわせて数万人が死んだだろうと言われました。しかし終戦から数年たち、その数がだんだん大きくなりました。とくに1947年に元国務長官の記事には、「原爆を利用したため、100万人の生命が助かった」と書かれました。この変化がなぜ重要かということ、原爆を正当化するならやっぱり数が多いほうが有利でしょう。100万人の命を救ったといえれば、原爆を落としてもよかったんじゃないかと言えるようになるわけです。

ほかの内容の議論もありました。アメリカ、イギリス、中国、ソ連にも、原爆を落とせば、無条件で日本が終戦を認めるという説がありましたけれども、その時代のアメリカ人の間にも、「無条件」が必要だったかどうか、という疑問がありました。特にそれは天皇制との関係ですけれどね。天皇制を継続していいと言ったら、すぐに戦争が終わったのではないかという話もあったらしいですね。

もう一つの議論は、原爆は普通の爆弾ではありませんから、落とす前に広島と長崎の市民に警告すべきだったのではないかという意見がありました。このように、アメリカ人の政治家、軍人の間でも原爆を使う理由がはっきりしておらず、逆に実際に激しい議論が続きました。ハーウィット氏がこういう歴史背景も市民に伝えるべきと考えた上で、その50周年記念の展覧会、展示会を計画しはじめました。

しかし、80年代の終わりから、90年代に入ると、

アメリカの社会はどちらかというとより保守的になりました。つまり新しい歴史（観）を入れるとアメリカの伝統に対する批判になるので、アメリカの保守派の考え方を持っている人が、原爆に関する批判自体を認めるかどうか。ある意味でモール地区という空間でアメリカを批判すべきではないと。アメリカの理想の場所で、アメリカ人が実際にやったことを批判するのはふさわしくないという意見が結構強かったのです。そういう反論を受ける可能性がありましたのでハーウィットも学芸員も警戒し、慎重に展示内容を計画しました。残念ながら、実際にNASMの学芸員が想像した以上の激しい反発がでてしまいました。

その反論を出した人たちを考えてみましょう。一つは軍事部と軍事産業。先生、今までの授業で軍事産業の説明がありましたか。

司会 全然。まだです。

ヴィーシー はい。ちょっと説明しましょう。これは今でもそうですが、毎年米国政府が軍事予算を計算しますね。戦車を買おうか、潜水艦を買おうか、爆撃機を買おうか、F22の戦闘機を買おうかと。海軍、陸軍、空軍、海兵隊が政府にそれぞれの兵器等を要求をします。陸軍が実際に国を守るために新しい戦車がある。海軍が実際にソ連や中国海軍からアメリカを守るためには、新しい空母艦を買わなければなりません。そして空軍だったらやっぱり新しい戦闘機が欲しい。

各々防衛省が予算を準備しますが、その背景には軍事産業の業者の影響があります。つまり新しい戦車をつくる会社の場合、もし中央政府が陸軍の予算を認めたら、お金は結局、その業者にも流れてくるでしょう。そして空軍が新しい戦闘機が必要だとうまく訴え、国がそれを認めたらその戦闘機をつくる業者が主にもうけるわけですね。

もう一つの重要な点は工場の所在地の政治背景です。防衛省の各予算が認められて戦車をつくったり、潜水艦をつくったり、戦闘機を作ったりす

るようになったら、それぞれの工場で働いている住民の雇用を確保することが出来ます。そこで投票する住民たちが、海軍や空軍や陸軍の立場を推したというか、支えた国会議員のほうに投票するわけです。そういうことで軍事問題、経済状況と政治の実態は複雑に絡まっています。

空軍の場合、空軍省そして空軍のために飛行機をつくる業者はやはり空軍のイメージを大切にします。空軍に関する不満や疑問があれば、陸軍や海軍にお金がいってしまいますのでその説得力を保つためにイメージのことをよくよく考える必要があります。

先に触れた第一次世界大戦の例をもう一回取り上げましょう。塹壕戦のせいで4年間の間に西部前線がほとんど動けなかったため、その塹壕にいた兵隊が毎日、大砲の攻撃を受け、大勢の若い兵士が無駄に死にました。そういう理由で第一次世界大戦の時代から、もし長距離の爆撃機をつくったら、塹壕戦の問題を克服する事が出来るだろうという案がでました。

その上、同時代に、本来は陸軍の一部だった各国の空軍が、陸軍から独立するために空軍の大將が空軍の特別性や必要性を強く訴え出しました。「戦争の処理は私たちにまかせろ」と。その代表的な人物はイタリア人の軍人ジュリオ・ドゥーエ（Giulio Douhet）でした。1921年に出版した『空軍論』に空軍の将来性、必要性を論じました。つまり空軍が強くなると、陸軍と海軍が不要になる。長距離の爆撃機で直接、敵の都市と市民を爆撃したらその敵は戦う意志をなくします。そして敵の産業を破壊すれば、軍事用品をつくることも出来なくなります。

アメリカでも1920年代にウィリアム・ミッチェル（William Mitchell）大將が同じことを論じました。アメリカが強い空軍をつくれれば、海軍の必要性が弱まるし、陸軍もそれほど必要ではないし、爆撃さえやったら戦争に勝ちます。

これから『Victory Through Air Power』（1943）という映画の一部を見ましょう。第二次世界大戦中にディズニー社がアレキサンダー・セヴェルスキー（Alexander de Seversky）少佐という軍人の本を取り上げて、アメリカの市民に空軍の必要性を訴えました。これをみながら「空軍の爆撃の利益はなにか」、「どうして空軍が重要か」等の質問に対して、この映画はどのように答えているのでしょうか。ディズニー社といいますと、ミッキーマウスのイメージがあるかもしれませんが、これもディズニー社の戦時中製品の一つです。そのことも考えてほしいです。

これは途中から映します。多分わかると思いますが、これが太平洋ですね。これは日本です。この映画では日本をタコで表して、タコが足を出して南太平洋の島と島人を捕獲しようとしています。

（映画放映開始）

（ナレーション）ここで、海軍や空軍が善戦しているので勝つだろうけど、日本軍が抵抗する。もうあと少なくとも3～4年間ぐらいかかるのではないか。そうするとアメリカの兵隊が死んでしまう。より大きな爆撃機をつくると、より遠いところから直接、日本の爆撃ができる。そうすると戦争が短くなる。アメリカ人は死なずにすむ。日本の市民の戦う意志をそげば、降伏するのではないか。特に直接軍事産業用の工場へ大きな戦闘機を飛ばしたら、非常に効率的に日本を爆撃できるのではないかと。特にアラスカから飛ばせば、それだけで、東南アジアを解放できます。

（ナレーション）これはその時代の空軍の理想です。

（ナレーション）そういうわけで爆撃すれば、直接、敵の産業の爆撃もできるはずです。軍事産業自体、どんどん大きな爆弾をつくる中で、より効率的に爆撃ができるようになった。

（ナレーション）ここで言いたいのは、空軍の

ほうにお金を出すと早めに処理できるということです。海軍の船ではなく、陸軍の戦車とか歩兵団でもなく、空軍にお金をくれと、そういうことを強く言っているわけです。

また空軍の元帥が飛行機全体を支配すると、より効率的に戦うこともできる。そういうことを強く訴えているわけです。ですから、プロパガンダのような映画として考えていいですよ。

（ナレーション）敵に対して破滅的な爆撃ができると言っているわけですね。

（ナレーション）富士山ですね。

（ナレーション）このイメージを見ると、何かいないと気がつきませんか。死人が見えないでしょう。

学生 何か、リアリティがない。

ヴィーシー そう。爆撃されているのにリアリティがない。なぜでしょうか。それもちょっと後で考えてみましょう。とりあえずこの映画を通して、1943年に空軍関係の者が空軍を重視して売り込んでいたことがわかりますね。勿論これはアメリカだけではなくて、イギリスもそうだったし、ドイツもそうだったし、各国に空軍の重要性を訴えている人がいました。ただ、アメリカの場合は非常に強くアピールできたわけです。

（映画放映終了）

それが大体、第二次世界大戦のプロパガンダです。戦後になって、海軍や陸軍と争って予算をお互い奪いあうことが目立つようになりましたので、空軍の要求を指示する団体が形成されました。これは Air Force Association（AFA：空軍協会）と言います。やはり「空軍があると戦争に勝つ」とイメージを守ることは非常に重要な仕事でした。

ジョン・コーレルという人物が、80年代のころ空軍協会の雑誌の編集者を務めていました。もし空軍が要求する飛行機に関して不満があったら、その必要性に疑問を抱く人がいれば、彼は雑誌の

記事に反論しました。その雑誌を見ると、軍事産業の企業の宣伝もいっぱいあるし、完全に空軍の立場を強調する雑誌です。

彼がハーウィット氏の計画、特に例えば広島の実験の被爆者の写真を入れることに対して強烈な批判を言いはじめました。ハーウィットが、アメリカ、特に空軍のよさに関して批判するなら非愛国的ではないかと、そういうことを論じた。被爆者の写真などを出すとやっぱり日本の立場を強調しすぎるのではないかとということもいいました。さらにその戦争を経験しなかった人が、被爆者の話等を聞くと同情してしまうので、戦争の事実がわからなくなるのではないかとということも強調しました。

例えば二枚の写真を比べましょう。これは長崎です。確かにすさまじい焼け野原の風景ですね。しかし長崎のことをよくわからなかったら、どのくらいの被害を受けたかよくわからないかもしれません。死体や被害者の姿が見えません。ここに何か建物があつたらしいのですが、それもはっきりわからないし、それほど強い印象があまりありません。それと比べたらこれはどうですか。(焼けた死体の映像を見せる。)

学生 怖いです。

ヴィーシィ これを見ると非常に刺激的でしょう。

学生 かわいそうだね。

ヴィーシィ この写真は視界の枠がぐっと狭くなるけれども、これは人間の姿ですから、被爆者のつらい経験が前の写真と比べるとよりよくわかります。この二枚を比較すると、こちらのほうがどう考えても刺激的です。この二枚の写真で分かるように同じ事件の写真があつても、撮った写真家の立場や写真の内容によってその映像の印象が違ってきます。コーレル編集者は、二枚目のような写真に反対しました。展示会にくる人、特に若いアメリカ人、戦争を知らない世代がこれを見ると、被爆者にたいして同情感が湧き、原爆の必要

性が分からなくなると考えました。

このように軍事産業や軍人の団体は、ハーウィット館長たちが考えた提案に対して猛反対しました。それだけではなくベテラン（退役軍人）の声も加わりました。アメリカに2000万人ぐらいいはいます。戦争で戦った人の立場から見ると、大体、第二次世界大戦は“The Good War (良い戦争)”と思っています。つまり戦争は仕方がなく、アメリカは正義と民主主義のために戦いました。もちろん各々の兵士の苦しみもありましたね。イーストウッド監督がつくった硫黄島の映画をとおして、実際に戦争に行った人たちがどういう経験をしたのか、それがよくわかると思います。

ベテランの中には原爆投下は妥当と思っている人が多いです。別の意味で、道徳的に別に問題はないと思っているわけですね。そちらの立場を想像すると、もし自分が19歳の海兵隊の兵士として沖縄に上陸したとき、自分の友達の半分以上が日本軍に殺されたという事を経験したら、今度の日本本土への上陸作戦で自分も死ぬのではないかと思うようになるでしょう。戦争はやはり恐ろしいですから戦争に行った人の気持ちから見ると、その気持ちが全然わからないわけではないですが、そのベテランがNASMの提案をよく理解しようとせずに猛反対しました。まずは原爆の正当性を疑問視すべきではないと言う意見が強いです。それとモール地区という空間はアメリカの中心ですから、アメリカ人の経験を強調すべきだと言いました。

実際は、ハーウィット館長はベテランの意見を全面的に否定するつもりはありませんでした。展示会の提案にアメリカ人兵士の経験なども十分入れようと計画しましたが、ベテラン・グループはハーウィット館長の説明を無視し、勝手に芸員がベテランのことを考えていないという固定観念をもって批判を続けました。さらに戦争の背景をもっと強く、日本軍がやった虐待や虐殺等も、

もっと説明すべきではないかと強調しました。

これでわかると思いますが、ハーウィット館長と学芸員が、歴史学者の論点をあげる一方、ベテランがどちらかという伝統的な見方、そして愛国心を中心とするテーマを強調しました。それが今度の事件の衝突の中心となる。その上、やっぱり議員も声をあげました。前に説明したように、軍事産業とか軍人との関係もあるし、投票するベテランの意見も聞くと議員が提案を批判し始めました。残念ながら彼らは提案の内容について、あまりよく読みもせず批判をしました。

ハーウィット館長や学芸員は、「愛国心」を否定するつもりはありませんでしたが、ただ広島の実爆投下事件の歴史に関して学者の疑問を示唆したために、強烈な批判を受けました。ですからNASMのスタッフが実際に何を狙ったか、反論を主張した者は全然理解しようという気持ちもありませんでした。エノラ・ゲイ展示会の計画者は単に裏切り者だと考えました。

最後にもう一つの点は80年代から市民の間に保守向きの気風がより強くでてきました。その影響で保守系メディアもエノラ・ゲイ展示会の問題に声をあげました。

その背景を説明する必要があります。60年代、70年代の間に公民権運動によって黒人や、ヒスパニック系の人、アジア系の人々の歴史、さらに女性の歴史などがよりよく教科書に出るようになりました。それまでに無視されてきたグループの歴史や実体もよく理解すべきだと言いつつ運動が結構ありました。一方、それに反発する市民団体も立ち上がりました。その新しい歴史を考えたくない。女性の歴史はどうでもいい、という人たちです。これに関して、皆さんは知っていますか。

学生 女性解放、公民権運動はあんまり。歴史でやりました。キング牧師などですよ。

ヴィーシー そうですね。そのキング牧師に反発した市民がいました。どちらかという、古き

よき時代に戻りたい。古きよき時代のイメージを損なわないよう、そういう反応もありました。そしてレーガン大統領の時代は、その気持ちを共有している人が政権を握り、いまだにアメリカの政治界に強力な力をもっています。ブッシュ大統領とチェイニー副大統領はこのグループから出ました。

そういうわけで1994年に共和党が国会下院選挙で勝利し、学校で教える公教育にどんどんどんどん保守的な考え方、保守的な見方を押し付けました。その調子で、保守的なメディアが80年代、90年代に「国内に文化戦争」が起こったと言いつつ出ました。一番甚だしい例は保守派のメディアがよりリベラルな考えかたを持つ人の言葉の意味をこじつけてわざと視聴者に対する誤解を招きました。言い換えるとアメリカの保守派の感覚は自分たちが想像している「本来のアメリカの心のために戦いましょう」と決心したのです。そういう人たちがやっぱり原爆は妥当と思ったのです。アメリカの戦略を批判すべきではないと強調しました。前に僕は恥ずかしいと言ったけれども、ほんとに恥ずかしいですよ。

エノラ・ゲイ展示会提案が問題になると、準備した提案をハッキリ理解せずにこのような保守派の評論家が批判を言い始めました。提案は実際にどういうものだったか全く知らない。内容は読んでない。内容は読んでなくてもいい。ちょっとアメリカ政府に対して批判的なことを言ったら、それは絶対に認めないという態度をとりました。その中でラジオのアナウンサーのラッシュ・リンバー（Rush Limbaugh）が、ハーウィット館長とNASM学芸員はアメリカを愛してないと言いつつ張りました。

このラッシュ・リンバーのラジオ番組は人気があり、聞く人は結構いました。今でもそうです。視聴者はラッシュ・リンバーの間違った解説を聞いて、自分の代表になる国会議員に文句を言いつ

しました。そうすると政治家からまたより強い批判が出てしまいました。さらにこのような意見を持っている人たちはアメリカの軍と関係が深いので、軍の代表者もその提案への批判もくわえました。結局、保守派のメディア活動の影響によって、提案に対する誤解がさらに広まり、問題がエスカレートしてしまいました。

改めて言うけれども、ハーウィット館長とスタッフが何をしようとしているか、批判を述べた者は理解しようとしませんでした。アメリカをけなすなら猛反発して批判します。そういう態度しかないです。ですから歴史の事実とか、歴史をどのように考え直すべきか、そういうことを全く考えようとしませんでした。自分たちがずっと今まで考えたアメリカのイメージの歴史、それしか認めようとしな、ほかの考え方は一切聞きこうとしな。そういう態度でした。この人たちはラジオとかテレビで、特にFOXニュースで調子に乗って誤解を招く批判を繰り返して自分の立場ばかりを強調しました。そして時間が経つと、その批判の声がどんどん高まって、ハーウィット館長と多くの学芸人は、「もうしょうがない」と、提案の内容を変更しました。つまり被爆者の写真は出さず、そして原爆の前の事情の説明を書き直すと言い出しました。それと軍事史の学者にもっと計画に参加してもらうようにとか、批判に応じようとしたわけです。たとえばここに書いているように、日本軍の捕虜になったアメリカ人の経験やそういう情報を前より重視するようになりました。ようするに、批判する人たちは展示会の説明のバランスを変えたかったのです。その意見を持つ人にとって「バランスのいい内容」は、本来のアメリカの歴史観をそのまま強調すべきということでした。被爆者のことより、アメリカの伝統的な理由を改めて明確に説明するほうが重要だと言う意見でした。

しかし、ハーウィット館長たちが内容を改訂し

ても、メディアは調子に乗って批判を繰り返すつづけました。ある意味でメディア業界の経済状況を考えると大きな問題と刺激的な批判は視聴者や読者の興味を引きますので新聞などがよりよく売れますね。日本の週刊雑誌もそうでしょう。そういうわけで実際はハーウィット館長と学芸員が反論に応じているのにそのことを無視して、さらに批判をつづけました。殊にこのAFA雑誌のコーレル編集者が指導的な役を果たしてエノラ・ゲイ展示会の提案に反対しました。

結局、NASMのハーウィット館長がどのように対応してもだめでした。英語の表現の中に「Death by a thousand cuts」があります。日本語に訳すと「じわじわと痛みながら終焉に至る」といってもいいでしょうか。つまり少しずつ相手を傷つけて殺す方法です。ハーウィット館長と学芸員が取り上げたかった歴史の課題を無視し、ある程度の根拠のない情報で頻繁に批判すると、その批判者の見方が「事実」になってしまいました。最終的にハーウィット館長とスタッフは時間と労力のかかった提案を諦めました。エノラ・ゲイの展示会は新しい歴史を紹介することを中止しました。ハーウィット館長が完全に負け、辞任してしまいました。今はエノラ・ゲイが展示されているけれども説明の内容はほとんど薄っぺらなものです。現在の陳列に原爆後の情報などが全然みられませんので、その難しい歴史問題を考えさせることはできません。2004年から単なるB-29型飛行機の例としてエノラ・ゲイはNASMのSteven F. Udvar-Hazy Centerに展示されています。

最初に触れたテーマ“Who Owns History?”に戻りましょう。エノラ・ゲイの事件の結果で分かりますが、歴史の変更を認めない団体が歴史を決める権力を持つようになりました。批判やメディアの利用によって自分の意見を強調し続けたので、歴史を少し変えようと思った学者と学芸員が完全に負けました。新しい資料を通して昔からの

歴史の複雑さがよく見えてきます。実際にその時代のアメリカ軍の指導者の間にも反論や疑問が結構あったけれども、その情報を公的に取り扱うことはまだ難しいです。

それからだれが勝ったかという、メディアを通して自分の文化的、政治的な権力の権力を高めたい団体です。その上ラッシュ・リンバーみたいな評論家も勝ったと言えるでしょう。そのラジオ番組に対していっぱい文句を言うと、視聴者の人数がふえているし、そうしてあの番組のためにアドバイザーと宣伝料を払う会社からお金を儲けます。

または皆さんによく考えて欲しいのは現代のメディアの影響です。ニュース番組などは確実な情報を探るはずですが、場合によってメディアは利益や政治的な権力を向上するために放送内容を制限したりします。今回FOXメディアやラッシュ・リンバーがエノラ・ゲイの問題を通してアメリカ人に及ぼす権力をアップしました。しかし、学生の皆さん、これは歴史の勉強方法、理解方法ではありませんよ。逆にこれは単なる一つの偏見を強調する活動だけです。

いまでもこの文化的な政治的な摩擦が続いています。2001年アルカイダのワールド・トレード・センターに対するテロ事件がありましたね。その後ブッシュ政権を批判した政治家、市民等は「あなたは非アメリカ人だ、あなたも愛国心がない」と強く訴えられました。同じ事で、伝統的な歴史に関して疑問を出した人が、「アメリカを愛してない」と貶されました。一つの疑問も許さないと言う態度ですね。別の例として去年（2008）の大統領選挙にもオバマ立候補に反対した人は「オバマはアメリカの市民権がない」とか「実際には隠れイスラム教徒じゃないかとか」のようなことを言い出しました。要するに相手を攻撃するためにメディアやウェブページを通して嘘をつきました。

博物館や教育機関のことに戻ると、このような公的設備は市民のために新しい史料を紹介して、研究の結果で歴史の説明をするはずですが。その上、もし多様な意見があったら、公開の討論をもうけてもいいですが、このエノラ・ゲイ事件で何がわかったかという、博物館の学芸員やスタッフはメディア・センスがないと教育的な責任を果たす事がより難しくなります。自分もメディアの、英語で言うと「spin」をうまく管理しないと、いくら正しい歴史を提示しようと思っても、押しの強い人や団体の厳しい反論に耐える事が出来ません。現代において「だれが歴史を決めるか」の問題は「だれがメディアの権力を把握しているか」に関連します。

もう一つの問題があります。歴史自体は必ず国家（あるいはある政権）を維持すべきでしょうか。政治的に歴史を利用した人の例はいくらでもあります。都合のいい情報を歴史書に載せ、不都合になる市民の苦しみや、政権の誤りを隠す、このようなことは決して珍しくありません。歴史教科書は国家のためにつくられているのでしょうか。歴史をどのように伝えたいのでしょうか。実は日本人のあいだにもこの問題がありますね。「君が代」とか、日の丸とか、誰がその意味をつけるのでしょうか。日の丸は、この明治学院の入学式に掛けられていますか。

学生 ないです。

ヴィーシー ないですね。「君が代」も歌いませんね。やっぱりそれは歴史に関する一つの見方ですね。歴史は必ず国のために編集すべきか。歴史は国の批判をしてもいいか。これから皆さんはこれをよく考えてほしいです。

歴史学者として、資料はやはり大事ですね。あるかないか、これによって歴史が変わるはずですが、今日の話では学芸員が新しい資料、課題、学者の解説を出そうとしましたが、これを完全に無視したい人たちと団体が反発しましたね。ここで

強調したい点は、歴史はただ古い物語ではなく、文化的、政治的な摩擦の焦点として今の社会に大きい影響をあたえる分野です。

それと、歴史をよく理解しようと思ったら一面だけではなく、他の見方も考えるべきですね。本当に広島原爆事件をよりよく理解するなら、アメリカ人のベテランの記憶などを取り入れながら、被爆者の意見と経験や原爆の遺品も扱うべきです。勿論これが難しい場合もあるでしょう。他人の意見を聞く時に、自分のイメージに悪い影響を与える疑問が湧いてくる可能性がありますから。歴史の研究者にとっても「聞きたくない」ことをちゃんと聞くのが重要です。

この「聞きたくない」という問題はこの授業で最後に指摘したい問題と関連しています。この問題は日本にもありますが、歴史学者が説明したい歴史観と一般市民、特に保守的な考え方を強調した市民の間で意見が合わない場合があります。これもエノラ・ゲイ事件に現れました。研究の結果によって学者の間に新しい解釈が流行ったが大勢の市民はついて行けなかったというか、自分の世界観を揺るがしたくなかったと言うか、やはり学者や学芸員と一般市民の立場が違っていました。講義の初めに「歴史はだれものか」ということを指摘しましたね。だれがその歴史を書いたか。何のためにそれを書いたか。だれがその歴史で得をするか。だれがその歴史で損をするか。まさにこのエノラ・ゲイ事件を通して、その問いかけの重要性がはっきりわかります。

その上、国際学の面から検討したら、この事件が国家主義を支えている歴史を強調する者と多文化的な歴史を認める者の差も明らかにします。今までの国＝文化＝民族の固定観念においてまずは自分の国の歴史を重視します。問題があまり無ければ、他国や他民族の歴史を認める余裕があるかも知れませんが、国と国との間の摩擦が発生したらそれを認める精神が弱まってしまう可能性があります

ますね。現在世界の状況を考えると国家中心の歴史という問題がでてきます。つまり国際化またはグローバル化の時代において、偏見や差別を支えている国家中心の歴史をどのぐらいを認めるべきでしょうか。このような狭い歴史をどのように超えて、新しい国際的な歴史を考えられるでしょうか。特に国際学部の学生にとって、国際史とは何でしょうか。アメリカの国家中心の歴史と日本人被爆者の経験と、両方を考慮に入れなければならないわけで、アメリカという国のこの歴史だけではすまないわけです。そういうわけでハーウィット氏に対する批判が強かった。日本人の声をそのまま入れると、アメリカだけの歴史ではない。こういう人たちにとって、それを認めることはできないわけです。逆に今日は取り入れていませんが、現在の日本人が戦時中の満州における関東軍の行動や、朝鮮半島の支配をどのように理解すべきか、これもよく考えて下さい。

ですから国際学部の学生には、国際学部の学生として歴史を読むときに、だれが何のためにその歴史を書いたのでしょうか。そして「国際史」「多文化史」をどのように書くべきか。この問題をよく考えてほしいですよ。

ほとんど時間ですけど質問は何かありますか。1時間、私はずっと話していたので疲れていると思いますが、質問ありますか。

ちょっと唾然とするでしょう。被爆者のことを考えると、なぜ認めることができないか。私もアメリカ人としても、その批判をする人の立場はわかりません。

学生 臭い物にはふたをとということでしょうか。

ヴェーシー まあ、それがいえませぬ。無視するほうが楽ですな。

司会 95年にあった事件ですね。ちょうどそのときにワシントンに留学していた日本人の女子学生が書いた本があります。『ヒロシマ・アメリカー原爆展をめぐる』というタイトルです。図書館

にも入っていますが、関心ある人はぜひ読んでほしいと思います。直野章子さんという人が書いた本なんです。これ、スクリーンをあけてもいいですか。

ヴィーシー はい、いいですよ。どうぞ。

司会 その中で出てくる騒動なんだけれども、やっぱり大論争があったんですね、当時、ワシントンにおいても。ヴィーシー先生のお話にもあったとおりで、歴史学者たちはハーウィットさんを支持したんです。問題はその歴史学者たちの声をマスコミがちゃんと伝えないということがあったんですね。メディアの問題がとても大きかったんですが、大学のようなところでは討論会が開かれたんです。

彼女、直野さんがいたのはアメリカン大学なんですけど、アメリカン大学で、さあどうだという討論会があったんですって。圧倒的多数の人たちは、空軍協会（Air Force Association）の立場だった。直野さんはいても立ってもいられなくて、マイクのところに行って話をしたんですって。勇気があったと思います。

でも、途中から涙、涙になってしまったそうです。ご本人はおじいさんが広島の人なんです。被爆しているということがあって、一生懸命に話した。もう涙で、話し終わった後で何が起きたかという、拍手が起きました。だからそういう包容力がまだ、その頃のアメリカにはあったということは覚えてもいいことだと思います。

直野章子さんというのは九州大学で社会学の先生になりました。『ヒロシマ・アメリカー原爆展をめぐる』はとっても読みやすい、本人の経験です。アメリカン大学で1995年に原爆展をやったんです。

日本の今の現実の問題でもあるんですね。新聞を読んでいる人は知ってのとおりで、「南京」という映画が、いま中国じゅうで上映されている。これは多分、日本で上映するのは難しい。どこも

引き受けないだろうと思うんです。もう一つの「ジョン・ラーベ（ラーベの日記）」という映画も上映されていますけど、これも無理でしょう。そういう現状が日本の中でもあるということは、僕らは忘れてはいけないことだと思うんですね。

特に君たちは大学に来たので、大学というのは知性を大事にするところです。知性の特徴というのは、民族が違って、国が違って、共通の言葉があるということです。わかり合える。正しいものは正しい、間違っているものは間違っているということを言い合えるということなんですけど、こうしたときに出てくる声です。さっき、ラッシュ・リンボー（Rush Limbaugh 資料では「ラッシュ・リンバー」）という人が話に出てきました。

司会 人気DJです。

ヴィーシー まあ、DJ。ラジオの名人ですけどもね。二面的な人ですよ。例えば麻薬を厳しく批判するけれども、実際に本人も麻薬を使っていました。そのような人です。

司会 でも、とっても人気があるんです。日本でもそういうDJが出てくると怖いと思っているんです。

ヴィーシー うん。戦う言葉は使いたくないけれども、私たちが正しいと思う歴史のために戦うときもありますよ。歴史の多面を否定する人の言うことをそのまま認めたら、これが歴史の事実になるんです。それにはっきり対応しないと、大勢の人がその限定された歴史を信じるようになってしまいます。

司会 だから、要するに戦うということね。何に対して戦うかということ、anti-intellectualismというものがあります。単に知性主義という、何かね、眼鏡かけて本を読んで、そして何か難しいことを述べる、解説する。そういう人を憎む気持ち。そういう人が嫌なやつだと思える感覚。何かお高くとまわっていて、上から下へ物をいうような連中。そういうやつらが言っていることは嫌だなと

いう感覚がやっぱり普通の人にはあるわけです。僕ら自身もあるかもしれない。

そういうものに、反知性主義にラッシュ・リンボーさんが訴えているわけ。僕ら自身が、これ、とても気をつけていないといけないというか。大学生自身ももともとは少数派だったんです。今は同世代の半数ぐらいでしょ。だから大学が大衆化したというふうに言うけど、少し前までは大学生は社会の少数派だったんです。大学で議論していることというのが孤立していった歴史があるわけです。戦前の日本がそうだった。だから僕ら自身が、まさにヴィーシーさんが言った、立ち向かわなくちゃいけないというものを自覚していくのがいいんじゃないかと思います。それがまさに核問題、僕らの命にかかわる問題にかかわってくるんですね。

参考文献

Boyer, Paul. "Whose History is it Anyway? Memory, Politics, and Historical Scholarship." In *History Wars: The Enola Gay and other Battles for the American Past*. Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt, eds. New York: Metropolitan Books, 1996.115-139.

Disney Studios. *Victory Through Air Power*.1943.
Foner, Eric. *Who Owns History*. New York: Hill and Wang, 2003.

Linenthal, Edward T. "Anatomy of a Controversy." In *History Wars: The Enola Gay and other Battles for the American Past*. Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt, eds. New York: Metropolitan Books, 1996.9-61.

Linenthal, Edward T. *Preserving Memory: The Struggle to Create America's Holocaust Museum*. New York: Columbia University Press, 2001.

Lipstadt, Deborah. *Denying the Holocaust: The Growing Assault on Truth and Memory*. Plume: 1994.

Sherwin, Martin J. "Hiroshima as Politics and History." *The Journal of American History*. 82.3 (Dec., 1995) : 1085-1093

Wallace, Mike. "Culture War, History Front." In *History Wars: The Enola Gay and other Battles for the American Past*. Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt, eds. New York: Metropolitan Books, 1996.171-198.

Wallace, Mike. *Mickey Mouse History and Other Essays on American Memory*. Philadelphia: Temple University Press, 1996.